

実行委員会形式の学校行事が中学生の学校生活に関するスキルに及ぼす影響 —過程及び効果に関する実証的研究—

人間発達教育専攻

学校心理・発達健康教育コース

M12046G

山形 弥壽子

本研究の目的は、中学生による実行委員会形式の学校行事運営を通して、中学生の学校生活、コミュニケーション等に関するスキルがどのように変化するかを明らかにすることである。調査では、中学1年生・2年生を対象として、学校行事の前後に、「学校生活スキル尺度」のうちの「自己学習スキル」「集団活動スキル」「同輩とのコミュニケーションスキル」の3つの下位尺度と、中学生用社会的スキル尺度、行事参加後の意見などについて質問紙調査を行い、実行委員の経験との関連性を分析した。その結果、2年生は、自己学習スキルと集団活動スキルは、実行委員の方が有意に高かった。また、自己学習スキルは1回目・3回目より2回目が有意に高く、集団活動スキルは非実行委員においては、1回目より2回目3回目が有意に高かった。1年生は実行委員と非実行委員の間に有意な差はなかったが、集団活動とコミュニケーションスキルについては、行事後に有意に上昇した。したがって、学校行事の準備や経験が生徒全般に好ましい影響を与えたことが示唆された。

キーワード 中学生 学校行事 生きる力 実行委員会

I 研究目的

学校行事は、リーダー養成、集団のルール作り、生徒相互の人間関係作りなどに効果的であるとされる。しかし、学校現場では、系統立てた組織的な取り組みにならず、教師の力量に左右されたり、取り組みの評価や分析も不十分で、一過性のものになってしまうことが多い。そこで、行事への取り組みによる学級集団・学年集団の意識やスキルの変化、及びその関連要因について調査し、その結果を踏まえ、効果的な取り組みについて検討したいと考えた。上記の変化、及び実行委員の経験回数、学年差や男女差との関連性について分析した。

II 研究方法

1) グループインタビュー

(1) 実行委員へのグループインタビュー

学校行事における実行委員会の経験が与える具体的影響をさぐるため、実行委員会形式で行事に取り組んだ卒業生にフォーカスグループインタビュー（以下 FGI）を行い、その経験を通して感じたこと、考えたことなどを聴き取り、行事の在り方、実行委員会のもち方について調査した。

(2) 教諭へのインタビュー

該当学年の教諭にインタビューを行い、学校行事に関わる生徒の意識や行動の変化、立候補を募って実行委員会を組織することの有用性について質問した。また、生徒に対してどんな言葉かけや働きかけをしたかなどを聴き取った。インタビューの内容は、指導内容を反映するものにとらえ、質問紙による調査結果の分析の際に活用した。

2) 生徒に対する質問紙調査

調査は、A市立B中学校の中学1年生311人、2年生291人を対象として行った。1年生は2012年1月の自然教室の前後に、また、2年生は、2012年12月に第1回目、2012年2月の神戸班別校外学習後に第2回目、2013年4月の九州への修学旅行後に第3回目調査を実施した。使用した尺度は、学校生活スキル尺度(飯田・石隈 2002)のうちの自己学習・集団活動・コミュニケーションと中学生用社会的スキル尺度(戸ヶ崎, 1997)、FGIによる追加項目とした。以上の調査については、無記名であるものの、各生徒に個別のIDを割り当てた。したがって、各自の各調査結果を対応させることが可能で、個々の変化を分析できる(図1)。

学校行事の及ぼす影響を検討するために、独立変数を実行委員経験と性差、従属変数を各スキルの合計得点とする2要因混合分散分析を行った。

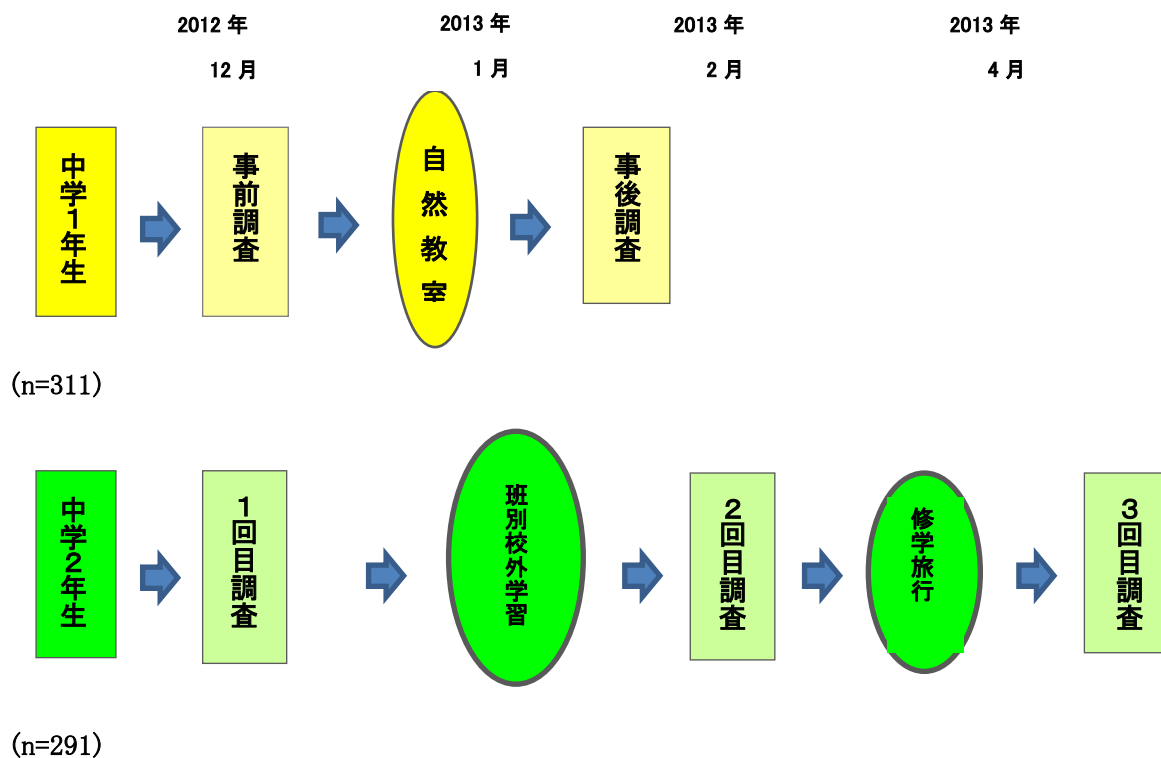


図1 全体の研究デザイン

III 結果

1) グループインタビューの結果

安梅(2003)の内容分析法に従い、全体の体系的な整理を行って、重要カテゴリーを抽出したところ、「立候補の理由」「活動を通して起きた自分の変化」「物事に対する自分の姿勢」「活動を通して変化した他の実行委員」「実行委員以外の生徒の変化」という5つのコアカテゴリーが抽出された。

2) 生徒に対する質問紙調査の結果

2年生の3回にわたる調査については、自己学習スキルと集団活動スキルは、実行委員の方が、非実行委員より有意に高かった。自己学習スキルの合計得点は、多重比較を行った結果、1回目と3回目より2回目の方が有意に高かった。集団活動スキル合計得点の単純主効果の検定を行ったところ、実行委員の2回目と3回目に有意な単純主効果が見られ、実行委員は2回目より3回目が高く、非実行委員は1回目より2回目、3回目が有意に高かった。

表 1 自己学習と実行委員経験の分散分析表（2年）

変動因	SS	df	MS	F	p	多重比較の結果
実行委員経験	1057.34	1	1057.34	6.68**	.01	
誤差	41337.48	261	158.34			
時期	200.54	2	100.27	7.54***	.001	2>1, 2>3
時期×実行委員経験	50.04	2	28.52	2.15	.118	
誤差	6939.44	522	13.29			

表 2 集団活動と実行委員経験の分散分析表（2年）

変動因	SS	df	MS	F	p
実行委員経験	306.61	1	306.61	4.08*	.044
誤差	19772.72	263	75.18		
時期	56.32	2	28.16	3.71*	.025
時期×実行委員経験	49.03	2	24.52	3.23*	.040
誤差	6939.44	522	13.29		

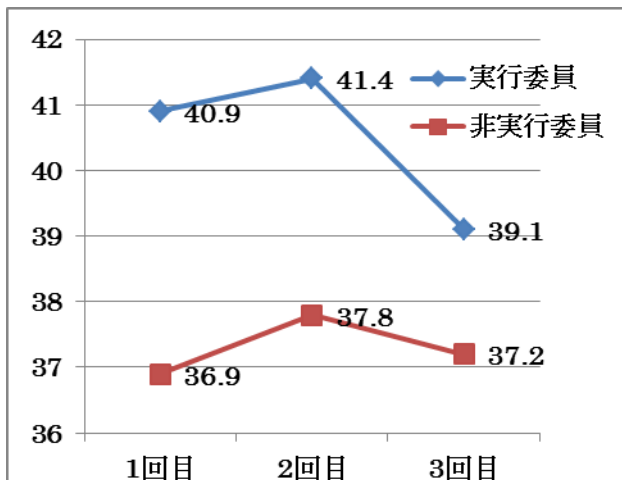


図 2 自己学習スキル合計得点の変化（2年）

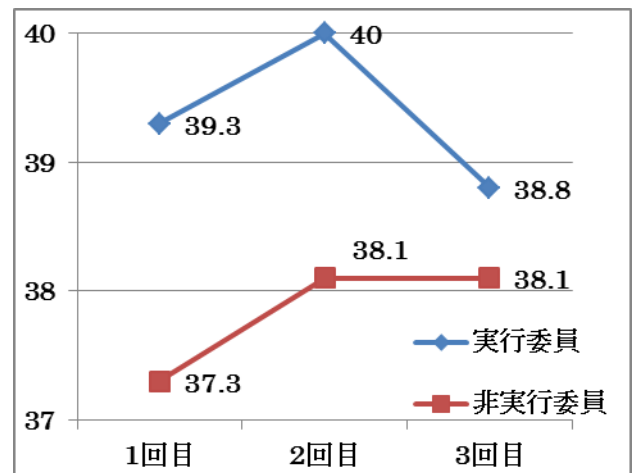


図 3 集団活動スキル合計得点の変化（2年）

1年生については、実行委員と非実行委員のスキル上昇に有意な差はなかったが、集団活動スキル合計得点とコミュニケーションスキル合計得点は、行事後に有意に上昇した。

表 3 集団活動スキルと実行委員経験の分散分析表（1年）

変動因	SS	df	MS	F	p
実行委員経験	47.83	1	47.83	0.78	.377
誤差	15397.6	252	61.1		
時期	40.51	1	40.51	6.97**	.009
時期×実行委員経験	24.93	1	24.93	4.29*	.039
誤差	1464.18	252	5.81		

表 4 コミュニケーションスキルと実行委員経験の分散分析表(1年)

変動因	SS	df	MS	F	p
実行委員経験	81.16	1	81.16	2.36	.126
誤差	8940.26	260	34.39		
時期	33.68	1	33.68	6.79**	.010
時期×実行委員経験	10.62	1	10.63	2.14	.144
誤差	1289.07	260	4.96		

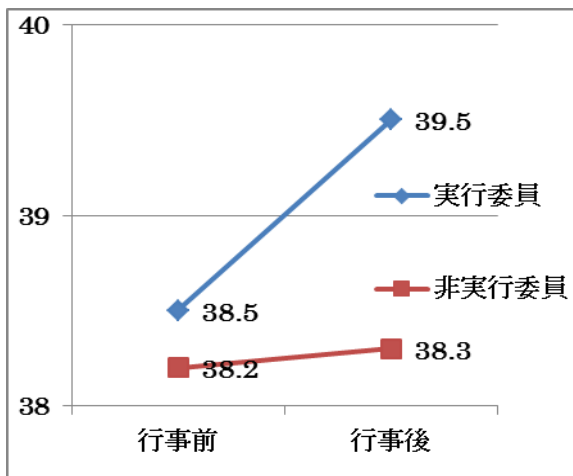


図4 集団活動スキル合計得点の変化(1年)

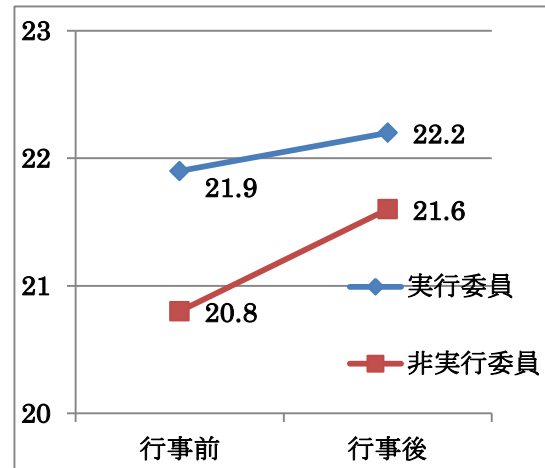


図5 コミュニケーションスキル合計得点の変化(1年)

2年生の3回に渡る縦断的調査と1年生の行事前後の調査について分散分析した結果をまとめたものを表5, 6に示す。

表5 2年生の調査の結果

実行委員と非実行委員:各スキル別の変化

スキル	交互作用	時期	群
自己学習		***	実>他
集団活動	*	実:②>③ 他:②, ③>①	実>他
コミュニケーション能力			
社会的			

注: ①②③は第何回目の調査か, 実は実行委員, 他は非実行委員

*** $p < .001$, * $p < .05$

表6 1年生の調査の結果

実行委員と非実行委員:各スキル別の変化

スキル	交互作用	時期	群
自己学習			
集団活動	*	後>前	
コミュニケーション能力		後>前	
社会的			

注: 前は事前調査, 後は事後調査を表す * $p < .05$

2年生の2回目と3回目調査のFGIによる追加項目(行事後の感想や自分の変化)について, クロス集計をし, 実行委員と非実行委員に差があるかどうかを調べるために, マン・ホイットニーのU検定を行ったところ, 2回目, 3回目ともに「行事で自分の役割を果たせた」と「行事で成長した」は, 実行委員の方が有意に高かった。1年生についても同じ検定を行ったところ, 「行事で成長した」「行事で新しい友だちが出来た」は, 実行委員の方が有意に高かった。

IV 考察

実行委員と非実行委員を比べた場合、学校行事への関わりの強さから、実行委員の方がスキルの向上がより大きいと予想した。2年生においては自己学習と集団活動は、実行委員が非実行委員よりスキルの向上が認められたが、1年生では、実行委員と非実行委員の間に有意な差はなかった。これは、行事の内容の違いによるものか、学年差によるものかは今後の検討が必要である。

先行研究によると、スキルは一般的に学年が上がるにつれて、低下する傾向がある(飯田他 2008)とあるが、今回の調査では、行事後にスキルの得点が上昇している結果が示された。性差については、2年生において自己学習スキル以外、1年生はすべてのスキルが、女子の方が有意に上昇しており、先行研究と同様の結果を示しているので、集団は一般的であると考えられる。したがって、今回の結果は、学校行事の体験、その準備やまとめの活動が、生徒のスキルに好ましい影響を及ぼしたことが示唆された。また、石川ら(2007)は、介入をしない限りスキル実行に対する自己評価は低下するため、積極的な予防・開発教育が必要であるとしており、学校行事を活用することがスキル低下予防に効果を上げられるのではないかと考えられる。「学校行事は行事が行われるその日だけが活動日ではない。むしろ行事日を含めてそこに至る過程こそが、生徒にとって意味のある教育活動であり、『自分くずし』や『自分づくり』のための時間でもある(岡崎他, 1996)」とあるように、実行委員が実行委員会を開いて行事を企画運営していくことは、行事を成功に導くだけでなく、日々の生活を充実させていくことにつながっていくことが考えられる。また、樽木(2013)が、「学校行事の非日常性は、生徒たち自身が、独自の時間的、空間的世界を創り出すことを通して、自己を新たな観点から捉えるきっかけとなるとともに、生徒の日常的な生活を内省することになる」と指摘するように、行事を通して、生徒は自分自身を振り返り新たな自己を発見したり、またそれまで知らなかった友人の良い面に気づくことが出来た。これらの結果から、学校行事を計画的に設定することは、生徒の学校生活スキル、社会的スキルの向上に寄与することが示唆された。

学校行事に関しては、学校全体または、学年全体で行うことが常であるため、対象群を設けることが難しいため、純粹に行事のみの影響でスキルが変化したかどうかを論じることは難しい。しかし、今日の日本社会において、学校行事の果たす役割は大きく、今後さらに学校行事の持ち方について検討を重ねることが必要であると考えられる。

なお、本研究の一部は、第60回近畿学校保健学会(2013.7)、第16回教育実践学会(2013.11)、学校教育学研究第26巻(2014)にて発表しました。

引用・参考文献

- 安梅勅江 2001 ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開 医歯薬出版株式会社
- 安梅勅江編著 2003 ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ/活用 事例編—科学的根拠に基づく質的研究法の展開 医歯薬出版株式会社
- 中央教育審議会 2013 今後の青少年の体験活動の推進について(答申) 2013年1月21日
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領 特別活動編 ぎょうせい
- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルに関する研究 教育心理学研究 50, 225-236
- 飯田順子・石隈利紀 2006 中学生の学校生活スキルと学校ストレスとの関連
カウンセリング研究, 39, 132-142.
- 飯田順子・山口豊一・石隈利紀 2008 学校生活スキルの発達的变化の検討 教育相談研究 46, 49-58
- 石川信一・山下朋子・佐藤正二 2007 児童生徒の社会的スキルに関する縦断的研究 カウンセリング研究, 40, 38-59
- 岡崎勝博・辻弘・曾根睦子・遠藤正之・小澤治夫・藍谷健・小澤富士尾夫・八宮孝夫 1996

学校行事が生徒の人格形成に及ぼす影響について（2）校外学習 筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告, 36, 177-195.

樽木靖男 2013 学校行事の学校心理学 ナカニシヤ出版

戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 中学生の社会的スキルと学校ストレスの関係 健康心理学研究 10, (1), 23-32

米川和雄 2008 中学生の学校生活スキルに及ぼす自己受容の結果 ヒューマン・ケア研究, 9, 18-29